

令和8

小論文 A

〔180点〕
〔50分〕

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は、白紙を除いて、4ページあります。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 3 解答は、〔令8 解答用紙〕に記述しなさい。
- 4 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

問題 次の文章を読んで、後の問い（問1～問3）に答えよ。

子どもに「Aやる気がない」ことを嘆く保護者の方は多いです。そこで学習塾などへ通わせれば解決できるのではないかと考え、相談を受けることもあります。でも話はそう簡単なものではありません。一〇代は小学校・中学校・高等学校と進みます。そして環境は激しく変わります。学習の内容が難しくなってくるのに加え、量も多くなるので多少頑張ったところでなかなか成績に大きな成果がありません。小学校の低学年ぐらいだと少し頑張れば目に見えた成果もありますが、学年が上がるにつれて、真剣に頑張らなければ結果につながらないこともあります。少しぐらいのやる気では、どうしようもないことを感じ始めます。さらに友だちの家の話も入ってきますので、家庭教師をつけてもらっている、塾の特別なコースに通っているなど、家庭での学習環境の違いにも気づいてきます。もしその子の家が経済的に厳しければ、「自分が習い事をすればお金もかかる。家は裕福でないし……」ということも考えるでしょう。

学習以外にも他人の何気ない言葉に傷付けられることもたくさんあります。異性との関わりや友だち同士の関係も複雑になってきます。実際、学習よりも友だち関係でエネルギーを使い切っている子どももいます。ところが学校で学ぶことの中心は、友だち関係や異性関係ではないため、子どもなりに手さぐりで過ごすしかありません。そのようなしんどい時期に「やる気がない」と叱られても、子どもの心を上滑りする言葉としか聞こえないこともあります。

ただ、たとえやる気のないように見える子ども、やる気はもっていると信じます。もし本当にやる気がなければ、学校でもやる気を示さず授業も受けたくないはずです。実際にそう見える子どもたちに気持ち聞いてみますと、親御さんに支えて欲しかったり、一人で頑張るのが寂しかったりすることも少なくありません。実は子どもは孤独がつらいのです。「親にそばにいてほしい。でも恥ずかしくて言えない」「やる気はある。でも孤独は嫌だ」そういった声が聞こえてきそうです。もし学校で孤独になりにくい環境があれば、家ではやる気を示さなくても学校ではやる気を出せることもあります。学校では「皆がするから自分もする」という子も

多いのです。皆がやっていることが正しいのかどうかの判断よりも、孤独から逃げられることを優先しているからです。

やる気が出せる前提として安心・安全な環境が必要です。孤独だと心から安心はできないでしょう。やる気のないように見える子が孤独を感じていないか、留意すべき点かと思えます。では子どもにも孤独を感じさせないようにするためにどうしたらいいのでしょうか。もし時間的な余裕があれば、一緒に教科書を見たり読んだりしてあげればいいのですが、忙しい親にとっては一緒に勉強することはなかなか困難です。そんな時には親も無理せず「難しいことを勉強しているね」「お父さん（お母さん）には、わからないことを勉強しているね」など、自分の正直な気持ちを伝えるだけでもいいでしょう。勉強を見てあげられなくても、違うことをしながら一緒に同じ空間にいただけでもいいのです。それだけでも落ち着くことは、どなたでも経験のあることでしょう。

(小見出し略)

子どもたちのやる気もてない原因に、子どもたちの質問や疑問に私たち大人がしっかり答えきれていないこともあります。

「何のために算数を勉強するの？」

「日本人なのにどうして英語を勉強するの？」

「そんな難しい化学式を覚えることにどんな意味があるのですか」

という質問に、大人自身も納得のいく答えを与えられないことがあります。「将来のため」「よりよく生きるため」と言われても、有名大学に行って有名企業に入ってすぐに辞めたとか、リストラに遭って突如つらい生活を強いられる人たちもいます。将来にどんなことが起こり、どんな生活になっているのか、正直だれもよく分からないのが現状でしょう。何のためにやる気を出す必要があるのかはつきりしないのです。大人にもはつきりしないことを、子どもにも自信をもって答えることはなかなか困難です。

子どもたちに勉強を教える際の重大な課題の一つは、実はこの「B勉強する目的」をどのように伝えるかだと思います。子ども一人一人、異なる夢や目標を持っています。大学進学を目指す子もいれば、高校進学せずに家業を継ぐことを選ぶ子、またプロス

ポーツ選手を目指す子もいます。四〇人学級において進路が異なる子がいれば、その子に適切な配慮をしてあげる必要もあります。そのため、特に義務教育においては、子どもたちがどのような人生の道を選択しても通用する普遍的な価値を伝えることが学校・家庭のいずれにかかわらず我々大人として必要になってきます。

とはいうものの勉強する目的として、今の立場からして私たちの頭に浮かぶのは、例えば、学歴を得るため、ビジネススキルを向上させるため、出世するため、収入を増やすため、豊かな生活をするため、教養を深めるため、専門知識を身につけるため、社会的評価を得るため、少しでもいい条件の結婚相手を見つけるため……など極めて現実的なことばかりではないでしょうか。そういった俗っぽい現実が当たり前になっている私たち大人は、果たして、目の前の子どもたちに勉強の目的について本心から伝えていけるのでしょうか。

（宮口幸治・田中繁富『「頑張れない」子をどう導くか―社会につながる学びのための見通し、目的、使命感』筑摩書房、二〇二五年、一三四～一三九頁、一部改変。）

問1 筆者は、二重線部「^Aやる気がない」ように見える子どもに「やる気」を出させるために、親には具体的に何ができて、子どもにとって何が必要であると考えているのか。本文に即して一五〇字以内で説明せよ。〔七〇点〕

問2 筆者は、子どもたちの「やる気もてない原因」をどのように考えているのか。本文に即して一〇〇字以内で説明せよ。〔六〇点〕

問3 筆者は、子どもたちに勉強を教える際の重大な課題の一つを、二重線部「^B勉強する目的」をどのように伝えるかであるとする。この筆者の主張を踏まえ、あなたが教師になったら、この「勉強する目的」を生徒にどのように伝えたらよいと考えるか、二〇〇字以内で述べよ。〔五〇点〕